小論文　　慶應義塾大学　経済学部　1/2

＜総括＞

試験時間　60分	総解答字数　600字

経済学を含めた社会科学を、文学や哲学といった人文科学および自然科学と比較して、そのテーマと方法論の特性を検討させるという問題である。もともと慶大経済学部は過去、現代における学問的知識のあり方と方法論について問う問題を小論文でくり返し出題しており、受験生に対して現代社会科学に対する意識の高さをチェックすることに熱心な学部であって、今年の出題もそうした傾向の上にある。

とくに設問Ｂはおそらく、文系の学問の中でも最も自然科学に近く、実験経済学などにおいてある種の「法則」や経済政策上の有効性を実験的手法で検証していく現代の経済学の方法が意識されて、出題されている。しかし必ずしもそうした現代経済学のある分野に限られた研究の態度と方法に関する知識が必要とされているわけではなく、あくまで広く社会科学の対象と問題設定、そして方法論がどのようなものであるかについての認識を問う問題として出題されている。

相変わらず、短い解答字数で欲張りな要求がなされており、簡にして要を得た記述で出題者の要求する事柄をすべて満たす解答を構成することがとても難しい。本当の意味で「頭の良さ」が試される問題である。

＜課題文の分析＞

大問番号	
内　容 （主題）	現代社会科学における問題設定とアプローチの方法
出　典 （作者）	加藤周一『読書術』岩波書店、1993年
長短・難易等 前年比較	長短（短い・やや短い・[変化なし]・やや長い・長い） 難易（易化・やや易化・変化なし・[やや難化]・難化）

＜大問分析＞

大問	出題形式	ﾃｰﾏ･課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント（設問内容・論述ポイントなど）
	課題文	学部系統的	A	説明	200字	下線部「哲学にも、文学にも、歴史的な発展はある。しかし自然科学と同じ意味での進歩はありません」について、自然科学と哲学・文学との違いがなぜ起こるのか、課題文に則してその理由を述べる。
			B	論述	400字	下線部「おおざっぱにいえば、社会科学者は、一方で必要な若干の古典を参照しながら、他方で絶えず専門雑誌を読んでいるということになります」について、このような社会科学者の読書傾向の理由について、考えて説明する。そのうえで、仮に自身が社会科学者で、歴史上や現代の出来事を研究対象とする場合、どのような問いを、どのように立て、どのように検証していくあるいは探っていくと考えられるか、具体的な問いを一つ挙げながら、課題文に則して自身の考えを述べる。

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」
※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」
※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

© 河合塾　2024年

小論文　　慶應義塾大学　経済学部　2/2

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

＜答案作成上のポイント＞

設問Ａの要約は、基本的には課題文からの抜粋で解答を構成できる。ただし課題文はかなりくり返しを含みながら、長々と議論を展開しているので、そこから下線部（イ）のような研究の在り方になる理由を論理的に説明できるように論点を抽出して200字以内でまとめるためには、優れた言語能力が要る。

設問Ｂについて。要求が多岐にわたっており、①社会科学者の読書傾向の理由について、考えて説明し、②社会科学における具体的な問いを一つ挙げ、社会科学者として歴史上や現代の出来事を研究対象とする場合、③どのような問いを、④どのように立て、⑤どのように検証していくあるいは探っていくと考えられるか、この5つに答えることが要求されている。400字÷5＝平均80字で以上5つを書かなければならないわけで、これは無理難題といえる。工夫した書き方で③④⑤をうまく分けて書いていく技術が求められる。

①について。自然科学は自然と技術による人工物を対象とし、本質的にモノの科学であって、そこに普遍的な法則を見出そうとするものである。文学や哲学という人文科学は、人間というきわめて個性的な存在について、そこに現れる普遍的な価値を独特のかたちで取り出すものである。以上に対して社会科学とは、個性よりもむしろ人間が形成する社会的諸関係における普遍的法則が探究の対象となり、かつ全時代に共通の普遍的価値よりもむしろ、現代的な社会的関係における諸問題の分析と解決が追求される学問領域である。課題文にはそれが明示的に書かれていないが、課題文に述べられている人文科学と自然科学の特性について裏返して考えれば、社会科学という学問の特性が理解できる。そこから下線部（ア）のような社会科学者の知へのアプローチの必然性を説明できればよいだろう。以上だけですでに200字程度かかる。これをどうにか圧縮して、150字以下で説明していかないと、後半の要求を満たす答案にならない。

②③④は一体で書いていかなければならない。ここで問題となるのは歴史学である。歴史学は社会科学か人文科学か、という論争を呼ぶテーマがあるが、歴史学は本質的には一回限りの個性的現象である歴史的事実を扱い、しかも事実そのものというよりも、その事実をめぐる人々の体験が重要な意味をもつものである以上、人文科学に類別されるものと考えられる。したがって設問にある「歴史上や現代の出来事を研究対象とする場合」とあるとき、歴史上の事件（たとえば第一次世界大戦とロシア革命といったような）を挙げる場合には、歴史学とは異なる社会科学的なアプローチの特性を示さなければならないから、難しくなる。やはり現代の出来事を取り上げ、なおかつ社会科学的な分析の対象として書きやすいように、世界で普遍的に見られる現代の状況を具体的場面として採り上げた方がよいだろう。

③どのような問いを、④どのように立て、ということでどのようなことが要求されているのか、いささかわかりにくいが、基本的には社会科学的な探究一般についての議論を、②で具体的な問題を挙げて分析し、さらに③④でそれをさらに具体的な、統計データという定量的に与えられるもの、およびアンケートやインタビューなどの定性的な言語で捕捉されるもので検証可能なような、そうした問題へと絞り込んでいくことを求めているのだろう。あるいは顕著な社会的現象を具体的問題として挙げたうえで、その背後にあるものについてある因果関係を設定する仮説を立て、この仮説を検証するための方法について問うていると思われる。社会科学的な問いをより具体的なレベルまで分析し、それを検証していく手続きを述べていくというもので、社会科学的センスが問われる。

＜学習対策＞

従来の慶大経済学部が出題してきた小論文問題では、具体的な社会的状況に対してcriticalな意味をもつ概念が主題として採り上げられていた。すなわち問題性を孕み、現代の問題状況の分析に際してその概念の理解が重要な意義をもつような、そのような概念を、具体的な問題状況に即して考察することが求められていたのである。2023年度入試の「人間の意図的行動と合理性」、2022年度入試の「集合知と多様性」、2021年度入試の「支配的関係ではない非対称的な関係」といった諸概念はそのようなものであった。

本年度の問題も、ある意味ではそうした問題となっているが、問われている概念の抽象度が一段高く、社会科学という知の在り方そのものが問われている。対策としては、社会科学系の小論文の問題を解きながら、社会科学的議論が満たすべき条件についてつねに意識し、そうした条件を満たすような思考態度を身に着けるということしかない。

© 河合塾　2024年